

本論文「アンドレ・ジッドとキリスト教——「病」と「悪魔」にみる「悪」の思想的展開——」は、1890年代から1930年代にかけて活躍したフランスの大作家アンドレ・ジッド（André Gide, 1869-1951）を対象に、作品に現れる「病」と「悪魔」という二つのモチーフから、ジッドの問い続けた「悪」の思想的変遷を考察し、ジッドとキリスト教との関りを明らかにすることを目的としたものである。

本論文は、序論、三部構成の本文、結論および書誌一覧からなる。序論は、問題の所在と目的を明確にし、全体の構成と扱う諸作品を示した。

第I部は、幼少期から1900年代頃までのジッドの「病」の体験と宗教思想、社会規範との関りを明らかにした。第1章は、自伝『一粒の麦もし死なずば』（1926）や伝記を手がかりに、幼少期のジッドと「病」の体験を考察し、その身体的不調の背景に自慰を「病」「悪癖」とみなす医学/宗教言説があり、ジッドが強いナルシズムと罪の意識に苦しみ、身心のバランスをとるために文学へと向かったことを示した。第2章は、初期の小説の「病」の表象とジッドの「病」観との関連を考察した。結核とそこからの回復、1893年のアフリカ旅行中の体験を経て、ジッドは「病」観のみならず宗教観をも変化させていった。それを踏まえて、象徴主義の影響下にあった最初期の小説『アンドレ・ワルテルの手記』や『ユリアンの旅』（1893）と、旅行後の『パリュード』（1895）を比較し、「病」の異同を明らかにした。第3章は、1895年のアルジェリア旅行での体験から、自らの性的指向性に目覚め、心身の平穏を得るに至ったジッドのその後の変化を考察した。ジッドは「病」を個性と考え、それまでの否定的解釈から脱し、『地の糧』（1897）で生の謳歌を説くに至るが、「病」＝「罪」とするキリスト教の見方についても、1899年のニーチェ論「アンジェルへの手紙（VI）」の考察から、ジッドがニーチェの「ありあまる生の表明」に共鳴し、自身の抱く「プロテスタントイスム」「ジャンセニスム」とそれを重ね合わせながら折り合いをつけていったことを示した。これを踏まえ、「病」から回復し「強者」となった『背徳者』（1902）の登場人物ミッシェルのインモラルな姿にも、逆説ながら、既存の「モラル」を揺り動かし、イエスの本来的な教えに立ち戻る可能性が含意されていたと論じた。

第II部は、こうした思索が、1910年代以降の作品のなかでいかに表出されていくかをさらに踏み込んで検討した。まず第1章は、繰り返し現れる「盲目」のモチーフに着目し、その意味を考察した。「盲目」を扱った作品は少なくないが、ここでは「盲目」が大きな位置をしめる『田園交響楽』（1919）や『贖金使い』、『エディップ』（1931）をとりあげ、何が「盲目」とされ、どのような宗教観が表出されているかを分析した。作中の盲人や自ら目をつぶす者、目の見えているはずの牧師の「盲目」は、「ルカによる福音書」の盲人に導かれ

る盲人のテーマを作中に具現化したものであり、ジッドが個人の意思や自我の自覚を通じてこそ「神」に至りうると考えていたことを明らかにした。これによって、神と自己の間に介在する存在に、ジッドが否定的であったことが明瞭になった。

第2章は、『法王庁の抜け穴』（1914）のなかでアイロニーをもって描かれる「病」を分析した。この作品には「病」に翻弄される多くの人物が登場するが、当時社会現象となっていたルルドの傷病者巡礼ブームとカトリック信仰の盛り上がり、ジッドがシニカルな視線を向け、カトリック教会の広める「信仰」が逆に心身の不調を生み出していることとみなしていたことを明らかにした。一方、健康で人を助けもすれば動機のない殺人にも至るラフカディオの不可解な人物像が、『パリュード』など前作にも「無償の行動」として現れているだけでなく、ドストエフスキーの『悪霊』のキリーロフの自殺から着想を得たものであり、狂人の口を通じて社会の病理を開示してみせるドストエフスキーの手法にジッドが深く共感し学んでいたことを明らかにした。

第3章は、ジッドの作品におけるセクシュアリティと宗教を、作品に現れる女性表象や、同性愛を直截に扱った『コリドン』をとりあげ、カトリック教会や当時の医学言説との関りを考察した。晩年の女性を扱った三部作を別とすれば、ジッドは女性を主題とはせず、結婚制度から逸脱して生きる男性たちを肯定する一方で、女性には、「ふしだらな女」「身もちの悪さ」という既存の表象イメージを付与していた。またジッドにとって「ノーマル」な同性愛は「ペデラスト」と「ソドミット」に限定され、女性の役割を望む「アンヴェルティ」は「性的倒錯」として保護の対象から外していた、ジッドの少年愛に基づく同性愛の立場は、古代ギリシャにみられた男性同士の関係に正当性の根拠を求めるもので、当時知られていた「ユラニスム」の復権をめざすものであったこと、さらにはフロイトに着想をえた作品『コリドン』は宗教規範や宗教の問題からは切り離されていたにもかかわらず、当時の教会関係者には物議をかもし、反道徳の烙印を押されるにいたったことなどが示され、ジッドのセクシュアリティと宗教をめぐる特質を多面的に照らした。

第III部は、ジッドがカトリック作家からの批判を機に「悪魔」についての思索を深めていく1910年代後半の作品に、「悪魔」がどのように扱われ、「悪」への関心がこれ以後どのように作品と結びついていったかを検討した。第1章は、この時期のジッドの悪魔論がいかなる性質のものかを検討した。日記の記述をもとに、1914年頃に友人のラヴェラと交わした会話をきっかけに、ジッドが「悪魔」について意識し始めたこと、その後、ウィリアム・ブレイクの『天国と地獄の結婚』に触れ、ブレイクの解釈を通じて、「悪魔」が人間に与える働きを肯定し、「悪魔」を出発点としつつ、「悪」を通じて「神」についての認識へ至りうると考えていたことを明らかにした。また「悪魔」が芸術に不可欠であると考えたジッドの、「悪魔」に与えた特異な性質を炙り出した。

第2章は、これを踏まえ、『贖金使い』（1926）の登場人物の描写に用いられる「悪魔」に注目した。主題も複雑で主人公もいないこの作品をジッドが「ロマン」と分類したこと、「悪魔」は内なる弱さや苦悩からくる精神的誘惑を意味し、「悪魔」に憑かれ誘惑に流され

る登場人物たちは、絶対者（神）を感じることはなく必要ともしていないこと、そうした生き方の極みに自殺があり、この行為を通じてジッドが「悪魔」の勝利する人間の悲惨さを浮き彫りにしていることを示した。とはいえジッドの真意は「悪魔」の勝利を描くことではなく、こうした人間の悲惨さから、逆説ながら、安易に「悪」を退け神を「善」と結びつけるカトリックの二項対立的な考えに警鐘を鳴らし、「神」へと至る手がかりとしてジッドが「悪」を必要なものとして捉え直そうとしていたことを明らかにした。

本論文は、大きな構えをもつ論文であり、アンビシャスな試みである、というのが、審査委員会の一致した見解であった。同性愛者を「病」とみなす時代にあつて、ジッドが自己を肯定し、なおかつあくまでキリスト者としてその信仰にとどまり続けることは容易ではなかったが、この二つの軸がジッドの創作活動に深く結びついていたのであり、ジッドは「神」と自己に徹底して向き合い、社会と対峙するなかで、独自のキリスト教理解に至った。こうしたことを本論文はジッドの作家としての営みを通じて説得力ある形で描き出した。本論文は、これまで同性愛やカトリック教会との関係で断片的に取り上げられ論じられてきたジッドの作品解釈に、あらためて包括的な像を提供するものであり、「悪」を通して「神」に至ろうとしたジッドの企て、独自の「神」との向き合い方を文学創造の考察を通じて開示した。

論文の構成も説得力があり、初期から晩年にいたる大きなスケールのなかで考察したことも本論文を重層的で立体的なものにするのに有効に働いている。個々の語彙や概念が、同時代の社会的コンテクストの中にあることを踏まえて、ジッドの生きた時代の表象に目配りし、医学書や教会や聖職者の言説との関り、「悪魔」をめぐるニーチェやブレイク、神に関するドストエフスキーの思索などとの関連を吟味し、ジッドの文学創造を時間のなかに位置づけて考察していることも評価できる。

さらに「病」を論ずるのにあたって、「盲目」をクローズアップしたことで、同時代のカトリック教会の「盲目」とは異なる、ジッドの意味付けが明確になっている。また「盲目」についての考察は、「病」から「悪魔」へと移っていったジッドの関心を時間を超えてつなぐ結節点となっている。「盲目」というモチーフは、幼いころに出会った少年ムートン君との出会いに始まる内在的なものであるが、ときに『田園交響詩』の盲目の少女ジェルトリュードであったり、『法王庁の抜け穴』に描かれるカトリック教会への「盲信」でもあったりする。しかしどの作品でも、「盲目」は「見える」ことが必ずしも物事の本質を「理解する」ことにはつながらないことを指し示す手がかりとなっていることを明らかにした。

文章も読みやすく、先行研究に丁寧にあたり、その上で独自の考察を果敢に加えていくところや、あくまで小説や日記、戯曲、書簡などジッドの著述に即して議論を構築していくところも評価できる。また多岐にわたる複雑なジッドの諸作品を数多く取り上げて、一貫した問いのもとに最後まで無駄なくまとめあげている点も、凝集力という点で高く評価できる。

以上の審査委員会の評価に見るように、本論文はたいへん優れたものであるが、弱点や欠点全くみうけられないわけではない。審査では、第I部のアフリカ旅行の体験を論ずる箇

所で、自慰と同性愛の違いが曖昧で十分区別されていないという指摘がなされた。また社会的コンテクストを重視すると言いながら、皮膚病や自殺など同性愛やキリスト教以外の対象については目配りが希薄であり、「病」を同性愛にあまりに限定しすぎてしまっているという指摘もなされた。また『コリドン』に見られるようにジッドはたしかに同性愛擁護の立場を示したが、ノーマルとアブノーマルの分類により同性愛者をその内部において差異化し、差別化していることはまちがいでなく、この点についての考察が欠けているという指摘もなされた。さらには、代表作である『狭き門』に触れていないのはなぜかという疑問や、ジッドが晩年に、「神」も「悪魔」と同様、人間の作り出したものであると述べていることから、ジッドが最後までキリスト教の信仰を抱き続けていたと言えるのかという信仰にまつわる疑問も出された。しかしこれらはどれも、本論文の独創性と学術的な価値を大きく損なうものではない。ジッドとキリスト教との関りについて、多くの作品をとりあげて考察を試み、一つにまとめあげた労作であることに変わりはない。本審査で指摘されたことはみな、今後、本論文を出版する際にさらに考察を補い、理解を深めていく上で生かされていくべき点であると考えられる。

よって、本審査委員会は、全会一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定した。